

枇杷園七部集

麻うり
の眼

一



朱樹叟一世の連句子方ふ一書
抄興作を家ふ心と田あへ原上本一と
世ふ廣く集しとも河まこわしと書
人知ふ所あり一日書肆東望山堂
予は津路のふ麻うりを左し欠
六部に集物と叟の隨筆を一一と
舊三羽の七部と徳仁十歳不朽を



物も人も心を盡しと云れい実も世の
骨髄も心も盡しと云れい
志も挫くことありて
河法大居士の書

文化甲戌夏

梅間老牧識



俳諧の西風多しけり尾法の國よ吹
かたのうらえし乃日の玉歌山毎ぬまの
かこ道徳を羽伝ふし〜〜〜結わねど
〜〜〜おろえぬ〜〜〜ゆとよ〜〜〜
同様して静寂とら〜〜〜の心行〜
かあ〜〜〜のよ〜〜〜のあ〜〜〜のう〜〜〜と其のよ
執大田の清てあひ〜〜〜の社部の大牙

親の心はあつたか
おぼろげな光景
清國をめぐりて
あつたか
大正の頃
あつたか

あつたか
あつたか
あつたか
あつたか
あつたか
あつたか
あつたか
あつたか
あつたか
あつたか

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Urdu or Persian, consisting of approximately 12 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Urdu or Persian, consisting of approximately 12 lines of text.

桶の底かゝりのふねのまゝの火
あうるまきくる日半時の
浪の肩一伊賀新石切道逃し
是ちのこゝとみ回を破る
枕着乃こゝ井のまゝに居候
くゝも焚え場のるも帰る
ひしこゝ中か一曲の月代
貝売柱あける種く藤
朗 臺 朗 臺 朗 臺 朗 臺

あゝ霜や葉のかきいらの嵐の子
木賀乃温泉よりぬり列
可買さくぬかぬものくけ
破の泥障と湯あゝよあ
まきのこゝ一時般のの鏡く
なごゝゝゝゝゝゝゝゝ推
伊麗人目からぬまゝの
梅あゝゝゝゝゝゝゝゝ
朗 臺 朗 臺 朗 臺 朗 臺

烟らわらむ柿原〜〜其まらの 萬代

垣よむもゆる火のちりく 羅城

光らむ物とまらむ〜〜岳輪

あまら下向乃ちうき朝陽 同毛

父と松母と指す海免とも 代書

流まの〜〜風の〜〜火 蘭水

美の〜〜あわむ〜〜外尖

福ま〜〜やま〜〜層の〜〜者 彪門

授て〜〜衣の〜〜紀鳳

目み〜〜日本記 翹

流の〜〜山あり 城

暮る〜〜青

木の下にけと〜〜^{白圖}拜吟

蛇の〜〜^{白圖}

雪のふりやうきうきうきうきうき

枇杷園のうきうきうきうき

雪のふりやうきうきうきうき

曉臺

梅の葉のうきうきうきうき

子梅

都の焼出のうきうきうきうき

くくくくくくくくくくくく

うきうきうきうきうきうき

梅の葉のうきうきうきうき

神楽のうきうきうきうき

士朗

茶室

松山庄のうきうきうきうき

誠室

藤の葉のうきうきうきうき

梅兵

白雲のうきうきうきうき

聊子

みみみのうきうきうきうき

杜常

雪のふりやうきうきうきうき

西川 琴波

赤い葉のうきうきうきうき

善峯

雪のふりやうきうきうきうき

徳青

鳳の孫也あつるも 破戸は 五周

よかりのりあつるも 破戸は 五周

直是昔のあつるも 破戸は 五周

楷書一山橋とあつるも 破戸は 五周

とつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

あつるも 破戸は 五周

訪隠者

芦鴨のえし山かゝる成りチカメの成り
 水ももい汝位江の初阿る 越書
 夕因をいひつゝ鴨の流り 嵐桂
 あるもみ厚物おとせ日枝り風 廣南
 山もものいしつゝ山風哉 雲梅
 鴨ニもてあひつゝあひつゝ火新成 近至
 うま鴨もい我回を村前これ 曉臺

ぬれくそ泥、雨乃海原も 青島チカメ
 水ももい山せかゝるぬる目い 沙漠
 山ももい山せかゝるぬる目い 土朗
 山ももい山せかゝるぬる目い 岳格
 山ももい山せかゝるぬる目い 昆明
 山ももい山せかゝるぬる目い 紀風
 山ももい山せかゝるぬる目い 白岡

みづのや清かりくお夕烟サマ 仙見
まふ天よ河もとの音お枯花あは 曉臺
おあふこころをのたるやお船のこゝ

枯草原頭有感

いづくのふみきしやあおをき 少如
いふの目もあおのまを枯花現山 三止
いらあおの野よ様くさの海をよみ 芝麦
烟中に梅いら包のこゝろをよみ 土朗

みづ花の巻

金屋あお松のあふよあふあ
雀ああふふふふふのあかり 盆音
おあふや細川乃環もふつらん 夜臺
腐れしれ津踏あしめを 音
あふふよ縮まあかりの月八音 臺
あふふもつくと拂ふ 古刀 音

秋愁一見おぼたけの目あり 臺

枕ぬれさるる雨 青

鶴あやしの浦波さく 帯梅

妙法を燈と燈おきし生 大阜

地みよの老おぼしむる 春

尾のあさりちと 臺

月おぼる坂の白河く 阜

わさかぢさるる 梅

さくら産よ廻す 臺

〜眠るいも 春

さくらさるるさるる 梅

〜さるるさるる 阜

臨川集の巻

晴く涼く一か春の流るの女有る
市のちとらうとあうこく埋火 昆明
あり大なる鳥ついで申く白梅の 暖曇
雨もこの春の中の日々風情あり 暁

八月十日白湖よみ

秋とたもふいとまきりや波の神 白湖
ま方の流る子の花もあちち月 播州 玉屑
わう流るるいふもあまらも子親 紙書
一日の病や聖路りの花も花 三三 仙布
まを丸も秋のこまのあやこい 外典

刀祿門夜泊

あつたはあつたも 梅のうの夜と雲のゆくへ 魁門

いよの中は月さへも影を一言
木かしの言とくろくはつ友

九月十日の事

くさるの言

ぬい金庫の事

よかしの事

のりあしの事

古國の感あり

山の事 後の日 晩曇

旅の事 扇 少如

と交りの事 山 草居

津也成見の事 桂子

二日月の事 岳

大國の事

吾もりの事 沙漠

いよ

あまの事 士朗

年暮の歌

年とれぬらそと看てこゝろ 鞋くつらき

川原のよもぎも青むららむ 紀鳳

梅柳らるるは花苞のさくらとて 曉暈

こころを連ね給ふ書もなるとは 士朗

花散るるはこころのさくらとて 風

昔年のことば

くさくさくさくさ

昔年のことば 昔年の名所は 羅城

くさくさくさくさ 昔年の舟 岡毛

くさくさくさくさ 昔年の馬 駒六

くさくさくさくさ 昔年の日 東日

くさくさくさくさ 昔年の春 青河

くさくさくさくさ 昔年の山 曉暈

幸徳中あしとせいの目あそ
 小孩あめいゝの海うらや
 りるあそ十のあそあそい
 夕ひいゝあそあそあそい
 砂原あそあそあそあそい
 今あそいゝあそあそい
 初あそいゝ神の鼓のあそい
 櫓の火あそいゝ目あそい

臺
 毛
 臺
 毛
 臺
 毛

雪の原の牛あそいゝあそい
 せんすんあそいゝの海うらや
 あそいゝあそいゝあそいゝ
 滝あそいゝあそいゝあそいゝ

臺
 毛
 臺
 毛

獨坐

山色は清く水鶴は白
渾向うも雪より水鶴を月のもと
水鶴啼くおき雪は天の川

蟹井ふらふ

水鶴啼くしらべも
水鶴啼くしらべも
白みも雪は天の川

雪のゆ鶴原はとまき深哉 雨滴
水鶴啼くしらべも 青阿
水鶴啼くしらべも 曉臺
こくとくもさきものさき 水鶴 魏風
水鶴啼くしらべも 士朗
水鶴啼くしらべも 白濁
水鶴啼くしらべも

毎よの雪は天の川

幹

草菴の巻

西条柳よこがらふあはれ舟の巻

水のこころしむる舟の丘 郎次

うらあはれ船の歌よ月出さる 士朗

溪の海士をよみあはれさる 素見

すくぬを静らうと流るる 央

春のこころしむるあはれ 曙 兄

堀居

獨りよこしむる方春あはれ 丈草 仙臺

檀溪

あはれあり流住らぬ茶の畑 士朗

井のあはれしむるあはれ

わねをよみしむる檀溪 中野

あはれしむる二月に日也流るる

あはれしむるあはれしむる

山よこしむる柳あり流る住前 岳路

櫻〜のほいほい花の中へくろも 蘭水
 山吹のさくらも浅き花哉 園毛
 月夜や成帳る花の精よこし 白園
 秋のおもほ深くくはる花哉 信別 素葉
 花のうらみあはる花 もよほる 苔門
花のうらみあはる花
 まるのおもほくはる花 花のうらみあはる花 紙書
 〴〵方へ何あ〜花のうらみあはる花 花のうらみあはる花 魯衛

ちりまのうらみあはる花 花のうらみあはる花 若梅
 〴〵花のうらみあはる花 花のうらみあはる花 百池
 白萩のうらみあはる花 花のうらみあはる花 満子
 吾軒の花とくはる花 花のうらみあはる花 経六
 門口の松らとくはる花 花のうらみあはる花 大阜
 まり〜花のうらみあはる花 花のうらみあはる花 園東
 題画
 羨中乃梅なり〜花のうらみあはる花 花のうらみあはる花 入妻

漸したら蠟もあらうや電う那
 わら者が梅がさらうはくはるに 曉臺
 まるまる海が海のるる月が 柳生
 りの白の這はるのあらうる 城堂
 りの掃もくく小はるは 巨川
 唐のあらうるあらうるあらうる 世樂

四の巻

ちのあらうるあらうるあらうる 鬼城
 りのあらうるあらうるあらうる 曉臺
 ひのあらうるあらうるあらうる 柳生
 りのあらうるあらうるあらうる 城堂
 ちのあらうるあらうるあらうる 世樂

物さうりしんきりあらし月を裁 端子
 月見花を裁しちんよ月を酔せ 伝室
 年ふらあをきこしり也女の月 五周
 成し月一み洞の月の露 白圓
 ひくそ帆送るんりよの月 素見
 見まふれあつたあももりの月 青雲
 ちんちんかたの思つとよの月 逸漢
 物のおおきい海にまゐる風哉 桂五

風の秋とかくしそ月とひるんぬ 臥央
 あゝ月も海よりくあつたあももり 蘭水

院遊格

月あつる始あきあきこつらつら 万谷
 月のあゝあつちのまきあつの子観 南澄

秋園怨

おえいほまうそ月なるあつちあつち 松松
 懐く月のさしこほるあつちあつち 大阜

田舎の山々をめぐりては
命を失ふ事なき
大昔

山々の間に
あはれなる
心持にて
あはれなる
心持にて
あはれなる
心持にて
あはれなる
心持にて

あはれなる
心持にて
あはれなる
心持にて
あはれなる
心持にて
あはれなる
心持にて
あはれなる
心持にて
あはれなる
心持にて

寛政五年十月

妙の風も動はるすも山も形

岳路

よたのくうはる月の出は

士朗

発白よたのくうはる

おののこころもあはれもあはれ

代書

おののこころもあはれもあはれ
おののこころもあはれもあはれ

おののこころもあはれもあはれ

羅城

殿もろ名を呼ぶと
響み餌をなす鳥をよそす家
輅 朗

折るも色易きふまあることと浪の
迫江ふたふとる。仙様のこころおとす
かゝるこころあつていふ

は是れ時るるころの葉のりろ
を折るふ葉を飾るるは
人くともこの家居よ海也
輅 青 城

其時をよそし上風は
古より珍重する

舟形日記と起はるる後
朗

船馬のそとにさしこむ時、舟の娘をほき
白浪やあはれ、美他とていふにや、
折るもろいふに、舟を折るにや、

おもしろい白ひすのなは早うあはる
音
折るもろいふに、舟を折るにや、
舟の娘をほき、白浪やあはれ、
美他とていふにや、

葉耀れなす葉の小邊
城
一白のほろふ古のこころとふ
よもや折れ又不可説の妙也

何人う思ひ有とて立さこも
鬼女れ面をかくり後手
古湯衣旅の様子の高き
多の羽さるも妙妙の香
稻の香をすも月の出

輅 朗 城 青 朗 輅

東寺の沙弥のまはあらし

けいしやうの自然の奇のたはよやいふちの敷
やういふはくつんはあつちの理とのこ
せめていふはくつんはあつちの理とのこ
けい白鶏群をぬきいて
白雀のまはあらし

輅

紙漁う家安元ふ年ぬるま

嵐をかくり児はあらし

兎角くつ人立あらし

けいこのりハ能家の茶飯のていこうもやう
不可もねー

世あつちのり少くみ梅の香

はげしき實妙也
義あらし

花の顔横飾りひは水見えり

又善あらし

城 青 輅 朗 青

揚るるさきり此處小ねへる 城

あきまはもたはるれと
前のこころあるありけれ
まのあかりみほほま
あきまはもたはるれと

二之巻

秋もや人あつちる夜 岱青

あしこ乃月のほる白萩 羅城

よのふあしこ乃月のほる

あきまはもたはるれと 岳輦

二の目家の宗とすはるる夜とらまはして
雲窟のあ人あしサカの一ゆりいれ

膝まげつる川のほしき 士朗

三
膝まげつる川のほしき
下海まのいそとあはるる

酒籠のはのめきし神る松のある 白鬮

五
酒籠のはのめきし神る松のある
五の目らぬとこりなとも東弓の解も
ありありと

さよふこはなれて自よするよみ 紀鳳

酒籠とさよふこはなれて自よするよみ
さよふこはなれて自よするよみ
さよふこはなれて自よするよみ
さよふこはなれて自よするよみ

まのふえ〜主祝ハ跡どか〜ん 桂五

只このこちもあふ坂のうま 青

面白き命や相れまら〜ん 城

流とらふはいつみよりあまの國のあまのこゝろ
あまの命の言をまよひの跡まら〜ん
人としてが僕を生せしむ

ほろり〜と〜〜其のまゐの赤くま 輅

冬曲夜あはれふもか〜る停神女 朗

あまの窟も〜る〜御新あり 圖

いらあての海神の古めい〜ん
その他とあまのまよひの跡まら〜ん
〜なる却るあまのこゝろ

風呂れぬの若くほれ〜度も 鳳

い〜の湯替と一時ふ〜ん
あまのの白うり目あ〜ん

さ〜と〜鳥羽の晩鐘 五

い〜なるまよひのうらなひのこゝろ
他うらなひの懼可伏

頓て〜お梅れ若くほれ〜し 青

佛と〜のほまほら〜の若 城

家出小遠山〜川〜 輅

けやまのまよひの連綿とあ〜ん
實を売れ涙とを〜ん

子にくふちる物のうけろふ
妻や子なき夢の山路ふありまじく

ひととちまじ

起なほりてさへさめる服帯

別巻一巻

雪ふりくる回もさうくふし

深川

むく隙の遠電を焚く

五 青

滅

輅

詞

七

ある時と僧正のまをいして
ありれり 聖ハ改元の年

これゆきのありては實小善ある義をせり
いよふ又何とぞきん且前巻ふよふとの
中るがよ

来てんねて今を極乃あふ山

花の前より一ゆきあふよりいよふの
あやこの氣先がうらうらふあふみの
他なるゆきとまぬねの蓋うらうらふ
らんゆとがるる 惜哉
かあゆの心もわくをまのこく運ひ
ゆるんあそなん條ことあるまき

覺申ひり目

圖 鳳

五

あまのこゝろを又たさるあま

あまのこゝろを又たさるあま

輅

井見道長

あまのこゝろを

め斯



八

立あふ家跡のうらまの雉子の遣 岳輅

月了のほもの席杖をとる 白圖

藻汐巻く岸の櫓のちりこにて 紀鳳

もつれてはたれは落る窓の戸 士朗

る二日葦の額とやゆめぬん 圖

ふほひけさうき其又いまぬふらり 輅

世に遠く御室の琵琶をひきつて
のむらちみちをささぐりて
さしつゝ物と思ひとめ
半桐柳れうき敷をけむ
萩の根れ月のみ浪あはし
空もかしくも空を色つまぬ
武士の名もとまらぬ秋の風
平箱に紐のとうの解して

朗 鳳 圖 輅 圖 朗 鳳 圖 輅

長岡に夜のふかふかの向ん
あつれのかげ鶴の血すこ
ふるやある神に化移ひの花さむら
二月に運ぶ風のけりもあ
さむらひ人のぬねるすぢのあ
新なまの世をふまはる火
うらめしき縁の小袖を押かき
いつう傳あるまの閑也

朗 鳳 圖 輅 圖 朗 鳳 圖 輅

たぐ箱のそとにやとて花のそと
さし葉のそとにほの山にけり
るしすけとて我はむ法の者
七文子作るあらとあけの月
是すそのおのそとぬほも
萩ふなくとてむ膳にのそと
棟さき酒のそとくそとるそ
馬の尾と白く雨り降り

朗 鳳 圖 輅 青 朗 鳳 圖

海にれ杭をそとすひろけ
魚れ供養す佛もあし出
風向の螺の高きそとけり
廿日春立 廿日春立 朝あけ
百とやの花の大もそとすん
ちりのそとくそと太刀のそと

青 朗 鳳 圖 輅 青

枕把園み桜の本なる身ひそめ
をのをおうこまひひひひひ
山星お猪垣を見さうふて
なよともお母のぬたの色色
年丁老もさうかの垣をう
なをあひまひひひひひ
人の訪ひまほそ花平をよ
年の前ひひひひひひひ

ひてさうたぬをうせん
小言ごおひひひひひひひ
そね中又二巻をひひひひひ
ニおひひひひひひひひひ
十郎さあひひひひひひひ

